

## 論文の内容の要旨

論文題目                   ミハイル・ブルガーコフの全一的世界観  
—初期作品から『巨匠とマルガリータ』へ

氏名                       大森    雅子

本論文は、20世紀ロシアを代表する作家ミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)の文学を初期作品から分析し、そのテーマや手法が最晩年の長篇小説『巨匠とマルガリータ』(1928-1940)の中に、最終的にいかに結実していったのかという点を明らかにしたものである。

ブルガーコフには、生涯で2度の精神的な転機があったと言われているが、先行研究において、彼の世界観の変遷と諸作品との関係が具体的に論じられたことはほとんどなかった。そこで、極めて宗教的な環境で幼少期を過ごしたブルガーコフが、青年期に医学という自然科学の分野に携わる中でダーウィニズムを崇拝し、無神論に傾倒した「第1の転機」を経て、「第2の転機」—すなわち、革命後の内戦と1920年代初頭の過激な反宗教プロパガンダとの遭遇によるロシア正教への回帰—を迎えたことが、後にイエスと悪魔に関する小説『巨匠とマルガリータ』を構想するきっかけの1つとなった点に着目する。そして、「第2の転機」が新たにもたらしたブルガーコフの宗教的世界観が、1920年代の初期作品から『巨匠とマルガリータ』に至るまでの創作にいかに反映されたかという問題を、当時の歴史的、社会的、文化的、そして宗教的コンテキストの中で検証する。

その際特に、ブルガーコフの世界観に影響を及ぼしたと考えられるウラジーミル・ソロヴィヨフ(1853-1900)とパーヴェル・フロレンスキイ(1882-1937)の宗教思想を取り上げ、彼らの哲学に特徴的な「全一性」という理念をキーコンセプトとして、ブルガーコフの初期作品に見られる全一的世界観が、『巨匠とマルガリータ』に受け継がれていくまでのプロセスを論じているのが本論文の大きな特徴である。

本論文は序論、結論、および4章から構成され、図版と参考文献表を含む総頁は原稿用紙換算 927 枚となる。

第1章ではまず、革命後の内戦に関する自伝的作品群(短篇小説『赤い冠』(1922)、『3日の未明に』(1922)、『襲撃(幻燈の中で)』(1923)、長篇小説『白衛軍』(1922-1924)、短篇小説『私は殺した』(1926)、戯曲『逃亡』(1926-28))の中に、フロレンスキイの地獄思想に通底する自閉的かつ悪無限的な円環の時空間が見出されることを指摘する。特に、円環運動のイメージは、プロットの形にも反映されており、その中では終末的状况が周期的に到来するという、一種の循環的歴史観が展開されている。そして、この円環型のプロットの中で主人公たちが経験する贖罪のプロセスこそが、ブルガーコフの「内戦もの」の作品群に見られる最大の特徴であり、彼がその後の作家人生を歩む上で創作の原点となったテーマだった。この贖罪のテーマは、後に『巨匠とマルガリータ』で、イエシュア(イエス)を処刑したピラトの苦悩の時空間で再現されることになる。一方、革命後のソヴィエト社会の混乱を描いた作品(短篇小説『13番地エリピト・労働者コンミュンのアパート』(1922)、『ハンクの火』(1924)、フェリエトン『楽園への階段』(1923)、『丸いハンコ』(1925)、『さまよえるオランダ人』(1925)、『定まらぬ住まい』(1924)、『魔の場所』(1925)、『故人の冒険』(1924)、中篇小説『悪魔物語』(1924))においては、円環の時空間の中でコミカルに描かれる悪魔的現象が、後の『巨匠とマルガリータ』の悪魔へと発展する諸要素を含み持っている。また、ゴーゴリの『死せる魂』に纏わる作品(フェリエトン『チーチコフの遍歴』(1924)、戯曲『死せる魂』(1930))では、ゴーゴリの原作におけるチーチコフや「内戦もの」における精神的弱者の主人公たちとは異なり、円環型のプロットの中でしたたかに生き続ける悪魔的な詐欺師の姿が描かれている。

第2章では、ブルガーコフのSF作品における円環型プロットの中に、彼の2つの精神的転機がいかに関与しているかという問題を考察する。中篇小説『運命の卵』(1924)と『犬の心』(1925)においては、科学者の時間操作に対する挑戦が終末的状况を生み出すものの、最終的にプロットは小説冒頭の時空間へと回帰している。そして、この円環型のプロットの中に、ブルガーコフの科学万能主義批判、中でもダーウィニズム批判を読み取ることができる。こうしたプロットが構築されたのは、当時の反宗教プロパガンダのテーマの1つであった、無神論に基づいた科学万能主義に対して、作家が批判的に受け止めていたこととも関係がある。彼は、直線的な連続性が前提となった科学主義一辺倒のダーウィニズムよりも、フロレンスキイが主張した、全一的な神のもとで二律背反的な諸要素が同時に並存する「非連続的」世界観を優位に考えていたと言える。また、戯曲『アダムとイヴ』(1931)にも、円環型のプロットと反宗教プロパガンダのモチーフが見出せる。『アダムとイヴ』のプロットにおいては、『ヨハネの黙示録』から『創世記』の時代へと回帰しているものの、それは時代が退行したことを意味しているのではなく、新たな歴史的サイクルにおける地上での新生への希望が、エヴロシーモフというキリストをモデルにした科学者に託されており、ここからもキリスト教と科学の総合的な知を理想的なあり方と考えていたブルガー

コフの世界観が読み取れる。

第3章では、『巨匠とマルガリータ』(1928-1940)における善悪二元論について論じる。この小説においても、円環運動のモチーフが、繰り返される苦悩と地上での再生の兆しを表す、両義的な役割を担っている。このように、一見相反する要素が一体となった両義性は、小説の主要なプロットの1つである、主人公たちの愛の物語の中にも見出され、それはソロヴィヨフの愛の思想(『愛の意味』(1892-94)、『プラトンの人生ドラマ』(1898))と比較することによって明らかとなる。また、ソロヴィヨフの終末論が展開された『3つの会話』(1900)との比較分析を通して、ブルガーコフ独自の「善」を為す悪魔像が形成された背景を探る。『巨匠とマルガリータ』のヴォラントは、『3つの会話』において最晩年のソロヴィヨフが描いたような「悪」の権化としての「アンチキリスト」ではなく、「区別は分離でない」というソロヴィヨフの初期以降の全一性の哲学に特徴的な、「善」と「悪」という一見相容れない概念同士が相補的に含み合う存在である。さらに、ブルガーコフが『巨匠とマルガリータ』を創作するきっかけの1つとなった反宗教プロパガンダ雑誌を取り上げ、その中でしばしば描かれていた「ペテン師」イエスと弱々しい悪魔に対するアンチテーゼが小説内で提示されていることを明らかにする。ブルガーコフは、内戦と反宗教プロパガンダという「第2の転機」によって、「善」と「悪」、「敵」と「味方」といった宗教的、倫理的な二項対立を、どちらか一方に軍配が上がるものとして捉えるのではなく、両者の相関関係をありのままに見出そうとしていた。そして、こうした相対的な世界観は、ソロヴィヨフやフロレンスキイの全一的な哲学思想によって支えられ、一層堅固なものとなっていったと考えられる。

第4章では、『巨匠とマルガリータ』における主人公たちの救済論を分析するにあたって、フロレンスキイの相対的な宇宙論が展開された『幾何学における虚数性』を取り上げる。まず、ブルガーコフが小説の「解説書」として読者に薦めていたというフロレンスキイのこのテキストに注目し、ダンテの『神曲』における宇宙空間が、地上、地上と天上の境界、そして天上の3つの圏に分けられるという理論について分析する。この三圏性の理論では、地上と天上という二律背反的な2つの世界が、「現実的無限」という神の存在を意味する無限論の概念の下で、全一的な宇宙の構成要素となっていることが示されている。ブルガーコフは『巨匠とマルガリータ』において、このフロレンスキイの宇宙論の中でも、特に地上と天上の境界  $v = c$  (物体の速度  $v$  と光速  $c$  が一致し、時間が  $0$  となる) の圏を、主人公たちが罪を贖う地獄的な時空間と見なしている。そして、巨匠とマルガリータにとっての  $v > c$  は、それぞれの  $v = c$  の地獄を通過し、罪が赦された後に到着した「永遠の隠れ家」であると考えられるのだが、この見解に、18世紀ウクライナの哲学者グリゴリーイ・スコヴォロダ(1722-1794)の安らぎに関する思想と14世紀のテサロニケの大主教聖グレゴリオ・パラマス(1296-1359)の光に関する神学を援用することで、『巨匠とマルガリータ』研究において未だに謎とされている「光に値せず、安らぎに値する」という巨匠の運命の解釈についても考察し、彼が神の本質=光源としての「最高天」ではなく、エネルギーとして

の光線が降り注ぐ、安らぎの天上空間へ移行したと結論付ける。

ブルガーコフは、宇宙空間の中で地上と天上の世界が「非連続的」に繋がっているというフロレンスキイの全一的な宇宙論に接し、なかでもこの「非連続性」が象徴的に具現化されている  $v = c$  の圏を、罪が赦される契機としての地獄の時空間と捉えることで、円環の時空間を打破して天上で救済される物語が構築可能であることを看破した。この救済の軌跡を主人公たちに託して描き出した作品が『巨匠とマルガリータ』であった。

以上のように、ブルガーコフが初期作品から描き続けていた贖罪と救済という宗教的なテーマは、ソロヴィヨフやフロレンスキイの全一性の哲学によって補強されていきながら、最終的に『巨匠とマルガリータ』の中に結晶化されていったと言える。